

『オリヴァー・トゥイスト』における語り手とオリヴァーの関係について

Relation between the Narrator and Oliver in *Oliver Twist*

水野 隆之

I

チャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)は、月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』に1837年2月から1839年4月にかけて連載された長編小説である。この作品の先行研究を概観すると、主人公のオリヴァーに関しては否定的な意見が多数を占め、オリヴァーを肯定的に評価する批評家は殆どいないことが分かる。すなわち、オリヴァーは自らの意志で行動することのない、人間として成長することのない人物、周りの状況に流されるままの受身の姿勢が目立つ消極的人物という否定的評価である。例えばロバート・トレイシーはこう述べている。

Dickens's subtitle, "The Parish Boy's Progress," suggests that Oliver is to grow and develop, but he does not really do so. Apart from three moments early in the novel, when he asks for more, knocks Noah Claypole down, and runs off to London, Oliver hardly acts at all. (3)

「教区少年の歩み」というディケンズがつけたサブタイトルは、オリヴァーは成長し、大人になっていくことを示唆しているが、実際はそうではない。もっと食べ物を下さいとお願いする、ノア・クレイポールを殴り倒す、そしてロンドンへと逃亡するという小説前半部での三つの場面を除けば、オリヴァーが行動することは殆どない。

トレイシーの言うように、特に作品の後半ではオリヴァーは自分の意志で行動することがなくなり、徐々に作品の中でのオリヴァーの存在が薄くなっていく。そしてマイケル・スレイターが「ナンシーは物語の後半で、主人公としてオリヴァーに取って代わることになった」 'Nancy was to replace Oliver as hero in the latter part of the story.' (109)と指摘しているように、他の登場人物、とりわけナンシーがストーリーの前面に出てくることになる。それとともに、オリヴァーを巡る物語も、彼の出生に関する秘密の解明へとその中心が移っていく。この小説の前半部分で最も印象的な場面と言えば、オリヴァーが「お願いです、もう少し食べ物を下さい」 'Please, sir, I want some more.' (OT 13)と懇願する場面であろう。しかし、作品の後半部分においては、オリヴァーが登場する場面よりも、オリヴァー救出に奔走するナンシー、サイクスによるナンシーの殺人、逃亡中のサイクスの精神錯乱、獄中のフェイギンなどを描いた場面の方が読者に強い印象を残す。そのため、

作品全体を通してのオリヴァーの位置づけが明確でなくなり、オリヴァーの存在感が弱まることが、オリヴァーに対する否定的な評価へとつながったのである。

しかし、『オリヴァー・トゥイスト』という小説の執筆過程を吟味してみると、オリヴァーの存在が徐々に薄くなるのは、ある意味で必然的なことであった。と言うのも、その背景には、執筆途中でディケンズがストーリーラインを変更する必要に迫られたという外的な要因があったことが、これまでの研究から明らかとなっているからだ。『オリヴァー・トゥイスト』はそもそも連載当初は長編小説として計画されたものではなく、短編小説ないしはスケッチのようなものだったという点で批評家たちの見解は一致している。ただし、ディケンズ自身はこの点に関して何ら明言していない。色々な状況証拠を積み重ねていくと、そのように推察できるだけである。その一番の根拠として挙げられるのが、当時ディケンズがベントリー社と結んでいた契約を変更したことである。1836年8月に、ディケンズはベントリー社と三巻本小説を二冊執筆する契約を結んでいたが、『オリヴァー・トゥイスト』執筆中の1837年7月14日に、ディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』をこのうちの一冊として受け入れるようにベントリー社に申し出た。そして1837年9月28日に、両者は『オリヴァー・トゥイスト』を先に契約した二冊の三巻本小説のうちの一つと見なす契約に合意した。この契約変更から、『オリヴァー・トゥイスト』は当初は長編小説として意図されていなかったと考えられるのである。また、この作品が単行本として出版された際や、その後新たな版が出版された際になされた作品中の表現の書き換えもその有力な根拠として挙げることができる。このように、ベントリー社との契約変更とその周辺事情の諸々を照査していくと、『オリヴァー・トゥイスト』は当初は長編小説として計画されていなかったと結論を下すことができるのである。

こうして短編から長編へと変更したことにともない、当然のこととして物語を引き延ばす必要が生じた。そこでディケンズは、物語の舞台を狭い田舎の教区から大都会ロンドンへと移すことによって、作品に新しい世界を導入した。その結果、この小説が当初持っていた社会批判的要素は弱まり、それに代わってロンドンの窃盗団の世界、オリヴァーの出生の秘密の解明、ローズ・メイリーとハリィ・メイリーの結婚を巡るロマンス、さらにはサイクスによるナンシーの殺人などのストーリーが書き加えられることになった。こうしてディケンズは『オリヴァー・トゥイスト』に当初意図していたものとは全く異なる新たなストーリーを組み入れたために、主人公オリヴァーの存在感が弱まるということになったのだが、この点をどう評価すべきだろうか。ベントリー社との契約変更のために『オリヴァー・トゥイスト』が短編から長編小説に変わった経緯とそれがこの作品の物語展開に及ぼした影響を詳細に考察したバートン・ウィーラーは『オリヴァー・トゥイスト』の批評家たちが引きつけられてきた問題の多くは、ディケンズの作品案が根本的かつ意識的に変更された結果生じたものである」 ‘many of the problems with which critics of *Oliver Twist* have been occupied are the result of radical and conscious alterations in Dickens’ plan

for the work' (58) と結論づけている。確かに主人公の存在感が弱まり、物語の筋が明確でなくなることは欠点であるに違いない。しかし、その原因はウィーラーが指摘しているようにはっきりしている。批評家が問題にしてきた要素は、それ自体この作品の欠点、あるいは作者の資質の問題として^{あげつら}論うよりも、ディケンズが執筆途中で計画を変更したために物語が方向転換した結果生じたものと認めた上で、この作品を論じた方が妥当であろう(途中で方向転換すること自体が問題だという見方もあろうが)。

ところでこの方向転換に伴い、物語の内容だけでなく、この小説の語り手の性質も変化する。ウィーラーが「語り力が弱まるのは、オリヴァーがサウアベリーの元を逃げ去ってから後である。最初の数章に目立つ書き手の介入は、ごく一部の例外を除けば、第 18 章以降では見られなくなる」*'Only after Oliver flees Sowerberry's establishment is the narrative presence muted. The authorial intrusions which characterize the early chapters disappear, with rare exception, after Chapter XVIII.'* (57) と述べているように、特に救貧院を巡る描写で顕著に見受けられた語り手の辛辣な口調が、物語の進行とともに少なくなっていく。さらに語り手の口調だけでなく、語り手とオリヴァーの関係も変化する。プロットが多岐にわたるにつれて、語り手の関心がオリヴァーから他の登場人物へと移っていき、語り手とオリヴァーとの間に距離が生じるのである。本論はこの語り手の変化とそれとともに語り手とオリヴァーとの距離に着目し、物語展開の上だけでなく、語り手との関係においてもオリヴァーの存在が薄くなっていく有り様を考察することで、短編から長編小説へと変更したことによる『オリヴァー・トゥイスト』の変容を再確認していく。

II

語り手とオリヴァーの距離を考えるにあたり、まず初めに語り手は語り手としての自分とオリヴァーとの関係をどう捉えているのかという点を見ていく。この小説の冒頭、第 1 章の第 2 段落は次のようになっている。

For a long time after it was ushered into this world of sorrow and trouble, by the parish surgeon, it remained a matter of considerable doubt whether the child would survive to bear any name at all; in which case it is somewhat more than probable that these memoirs would never have appeared; or, if they had, that being comprised within a couple of pages, they would have possessed the inestimable merit of being the most concise and faithful specimen of biography, extant in the literature of any age or country. (OT3)

教区の外科医によって悲しみと苦しみのこの世に案内されてから長いこと、その子供が

生き延びて卑しくも名前を持つことになるかどうかはかなり疑わしい問題であった。その場合には、こういった回想記が出ることはなかったということは十分にありえるだろう。あるいは仮に出たとしても、数頁以内に収まるものなので、時代と国を問わず、現存する最も簡潔かつ忠実な伝記の見本という計り知れない価値を持つものになったことであろう。

ここで注目すべき語は ‘memoirs’ と ‘biography’ である。つまり、これから語られるオリヴァーにまつわる文章は彼の伝記と捉えることができる。『オリヴァー・トゥイスト』はオリヴァーの伝記あるいは伝記的小説であることは、次に引用する語り手の自己規定からも読み取れる。

That Oliver Twist was moved to resignation by the example of these good people, I cannot, although I am his biographer, undertake to affirm with any degree of confidence; but I can most distinctly say, that for many months he continued meekly to submit to the domination and ill-treatment of Noah Claypole: (*OT* 40)

私は彼の伝記作者であるけれども、オリヴァーがこういった善良な人々の手本によって諦めの気持ちになったのだと自信を持って断言すると約束することはできない。けれども、はっきりと言えるのは、何ヶ月もの間、彼は大人しくノア・クレイポールの支配と虐待に耐え続けたということである。

ここで語り手は明確に自分をオリヴァーの ‘biographer’ と称している。ここからもこの作品はオリヴァーの伝記であり、語り手はその書き手であると見なすことができる。この少し後で語り手は以下のように述べる。

And now I come to a very important passage in Oliver’s history; for I have to record an act: slight and unimportant perhaps in appearance, but which indirectly produced a most material change in all his future prospects and proceedings. (*OT* 41)

さてここで私はオリヴァーの物語においてとても重要な出来事に至る。というのも、ある行為を記さなければならないからだ。それは見たところ、つまらない、取るに足りないものかもしれないが、彼の将来の見込みと成り行きに重大な変化を間接的に引き起こした行為である。

ここで語ろうとしている重要な出来事とは、オリヴァーが自分を虐待するノア・クレイポールを殴ったことであり、それがオリヴァーが一人ロンドンへと旅立つきっかけになったという点で重要ということである。しかし、オリヴァーがロンドンに旅立つことは、彼の「将来の見込みと成り行き」に変化をもたらしたから重要というだけではない。この小説の進む方向がこれを契機に大きく変わるという意味でも重要である。それとともにここで注意すべきなのは ‘Oliver’s history’ という表現である。ここでは ‘biography’ ではなく ‘history’ という表現が使われているが、この小説で ‘biography’ という語が用いられるのは先に引用した箇所だけで、以後はこの ‘history’ という語が頻繁に使われることになる。ただ、ここではその本質的意味はそれほど変わらない。語り手がオリヴァー・トゥイストという人物の生涯を描き出す物語という点で、ここでの ‘history’ は ‘biography’ と同意語と捉えて問題ないだろう。‘biography’ から ‘history’ への変化に呼応するかのよう、第 17 章で語り手は自分を「著者」 ‘historian’ (OT118) と呼び、‘biographer’ から ‘historian’ へと自分の呼称を変えている。また第 27 章の冒頭でも語り手は自らを「そのペンでこれらの言葉を綴る著者」 ‘the historian whose pen traces these words’ (OT189) と述べている。オリヴァーの経歴を記す書き手としての自分を存分に意識していることが窺える一節だが、ここでの ‘historian’ についてジョン・ドルーは「偽の編者兼伝記作者」 ‘the spoof editor-cum-biographer’ に取って代わってディケンズは「信頼できる語り手、つまり著者」 ‘an authoritative narrator, an [sic] ‘historian’」を用いていると指摘している(44)。示唆に富んだ評言ではあるが、やや説明不足の感があり、若干の補足と修正が必要と思われる。この作品での ‘biographer’ から ‘historian’ への変化、また ‘biography’ から ‘history’ への変化を考える時、作品中における ‘history’ という語の意味の変化を考慮に入れなければならないからだ。『オリヴァー・トゥイスト』には章のタイトルを含め、‘history’ という言葉が頻繁に用いられているが、その意味合いは微妙に異なる。先に引用した箇所での ‘history’ は、語り手が記すオリヴァーの ‘history’ であり、オリヴァーの ‘biography’ と同じ意味を持っていると考えられる。しかし、先に列挙したようなストーリーが新たに書き加えられるにつれて、だんだんと作品中で用いられる ‘history’ の意味が変化していくのである。それゆえ、‘history’ の意味の変化に応じて ‘historian’ の意味も同様に変わると考えねばならない。この小説で用いられる ‘history’、‘historian’ という語は ‘biography’、‘biographer’ の単なる言い換えではないのだ。次にこの ‘history’ という語の意味の変化について考えてみる。

III

この小説での ‘history’ という言葉の意味の変化は大きく二つに分けられる。一つ目として、当初は語り手の扱う対象がオリヴァーの ‘history’ だけだったのだが、だんだんと他の登場人物の ‘history’ もその対象になっていくという変化が挙げられる。そして二つ

目は、オリヴァーの ‘history’ が語り手ではなく、他の登場人物によって扱われるものとなり、それとともに ‘Oliver’s history’ の意味する内容も変化していくことである。それゆえに『オリヴァー・トゥイスト』で用いられる ‘history’ という語について考える時、誰のどのような ‘history’ なのか、さらにそれは誰によって扱われる ‘history’ なのか、言い換えれば ‘historian’ は誰なのかという点がポイントになる。

まず ‘history’ の一つ目の変化、つまりオリヴァーの ‘biography’ とほぼ同じ意味と捉えられるオリヴァーの ‘history’ から他の登場人物の ‘history’ へという変化について見ていく。先に述べたように、この小説が短編から長編へと変更になったために、新たなプロットが加わり、その中心がオリヴァーから他の登場人物、とりわけナンシーへと移っていく。語り手とオリヴァーの距離が大きくなるのはそのためである。語り手はその後 ‘history’ という語を用いることはあるが、その場合の ‘history’ とはオリヴァーの ‘history’ という限定された意味ではない。『オリヴァー・トゥイスト』というタイトルをつけられた小説の中で扱われる ‘history’ となる。例えば次の引用を見て見よう。

Upon the night when Nancy, having lulled Mr. Sikes to sleep, hurried on her self-imposed mission to Rose Maylie, there advanced towards London, by the Great North Road, two persons, upon whom it is expedient that this history should bestow some attention. (OT 305)

ナンシーがサイクス氏を寝かしつけ、自ら課したローズ・メイリーへの任務を果たそうと急いでいた夜、グレート・ノース・ロードを通過してロンドンへ進む二人がいたが、この物語が二人にいくらか注意を向けることは適切なことである。

ここでの ‘this history’ を ‘Oliver’s history’ に書き換えることはできない。この段階ではもうこの小説で扱われる ‘history’ はオリヴァーの ‘biography’ ではなくなってしまうのだ。さらにこの変化は ‘Oliver’s history’ も、この作品で語られるいくつかの物語のうちの一つに過ぎなくなり、この小説がオリヴァーの伝記的小説ではなくなったことをも意味するのである。

次に二つ目の変化、‘Oliver’s history’ を扱う人物の変化とその内容の変化、つまりオリヴァーの何に関する ‘history’ かという意味の変化を見ていく。この小説はオリヴァーが救貧院で生まれる場面から始まる。これは主人公の誕生から語り始め、その後その人物がどのような人生を歩むのかが語られる伝記的小説の典型的なスタイルと言える。バリー・ウェストバーグが「『オリヴァー・トゥイスト』は少なくとも子供の誕生から始まり、それゆえに、成長の過程を扱うこと、様々な難問と可能性の両方を象徴する時間のただ中で変化する個人に起きる複雑な出来事を扱うことを約束するように思われる」 ‘*Oliver Twist*

begins, at least, with the birth of a child, and thus seems to promise a treatment of the process of growing up, of the complexities that arise in an individual who changes in the midst of a time that represents both problems and possibility' (3)と云うように、この小説の書き出しは、オリヴァーの成長過程がこれから描かれることになることを読者に予想させるものである。加えて「それは厄介なことになるだろう」 'it will be troublesome' (OT4)、「あの子供は絞首刑になるだろう」 'That boy will be hung' (OT15)とオリヴァーの未来を予言する人物たちが登場する。オリヴァーがどのような人生を歩むことになるのか、「絞首刑になる」という予言が当たるかどうか読者の関心の対象になるのは当然である。つまり、この段階ではこの小説は、オリヴァーの未来を語る物語という意味での 'Oliver's history' と言える。しかし、オリヴァーが教区を飛び出してロンドンに出た時点でこの小説の進む方向が大きく変わる、と先に述べたように、これ以降 'Oliver's history' の意味が大きく変わっていくのである。

'Oliver's history' の意味の変化とは、オリヴァーの未来についての物語から彼の過去についての物語へとという変化である。そしてこの変化は、語り手とオリヴァーの距離が大きくなることと同時に進行していく。と言うのも、この意味の変化とともに 'Oliver's history' の担い手が、語り手から他の登場人物に取って代わられるからだ。オリヴァーの過去が語られるのは、直接語り手を通してではなく、他の登場人物がオリヴァーの過去を探り出そうとする行為を通してである。そして語り手だけでなく、他の登場人物、具体的にはブラウンローやロズバーンなどがオリヴァーの 'history' という語を用い始める。オリヴァーはロンドンでフェイギンが率いる窃盗団の一員に入れられるが、運よくブラウンローに保護される。そのブラウンローがオリヴァーから聞き出そうとしたのは「オリヴァーの前歴」 'Oliver's previous history' (OT98) であった。そしてブラウンローはこれと同じ表現、「彼の前歴」 'his previous history' (OT122) という表現を失踪したオリヴァーの安否を尋ねるために掲載した新聞広告の中で使っている。これは 'Oliver's history' の本質が変化したことを表わしている。つまり、これまで語り手が独占的に扱っていた 'Oliver's history' が、他の登場人物の手（ここではブラウンロー）に移ったことと、'Oliver's history' の意味がオリヴァーの未来の物語から過去の物語へと変化したことを意味する。ブラウンローやロズバーンはオリヴァーから過去を聞き出した人物、オリヴァーの経歴を知る人物であった。そして彼らが語り手に代わり、'Oliver's history' を完成させようとする。この点で、リチャード・ダン「ブラウンローは物語の『著者』になる。彼は色々なものを関係づけ、プロットを解くのに必要な自白をさせるのである」 'Brownlow becomes an "author" of the story: he makes the connections and forces the confession necessary to resolve the plot' (68) という指摘は的を射たものと言える。ただし、ブラウンローたちが明らかにしようとした 'Oliver's history' はオリヴァーの出生にまつわる 'history' であった。ゆえに、彼らが 'Oliver's history' と云う時、それはオリヴァーの過去を意味することになる。

このように ‘*Oliver’s history*’ の変化とは、オリヴァーの未来を語る ‘*history*’ から過去を扱う ‘*history*’ への変化であり、それが語り手ではなく、他の登場人物によって扱われるものになる変化である。冒頭でオリヴァーの消極性について述べたが、その原因もある程度ここから説明できる。つまり、オリヴァーの物語にまつわる時間の流れが未来から過去へと逆行するために、オリヴァーは作品の後半になるにつれて行動しなくなり、成長もしないのである。次にこのオリヴァーの消極性と語りの関係について見ていく。

IV

オリヴァーの消極性を指摘する批評は冒頭で挙げたトレイシー以外にも、「オリヴァーには自発的な意志決定力は殆どない」 ‘*There is little active volition in Oliver*’ (Miller 42)、「オリヴァーは自発的な動作主というよりも消極的な受難者である」 ‘*Oliver is less an active agent than a passive sufferer*’ (Pykett 46)など枚挙に暇がない。それほどオリヴァーの消極性は際立っている。それは小説における語りという点でも同様である。この小説はオリヴァーの生涯を記す伝記として始まっていることから自明のことではあるが、自伝の形式を採っていない。つまり、オリヴァーは行動しないだけでなく、自らの物語を語る人物として設定されていないのである。例えばブラウンローのハンカチを盗んだとしてオリヴァーが尋問を受ける場面があるが、オリヴァーは熱に浮かされていたこともあり、自分の名前すら答えることができない。それに対して治安判事のファンクは「ああ、その子は話そうとしないのだな？」 ‘*Oh, he won’t speak out, won’t he?*’ (OT73)と言う。この場面が物語るように、オリヴァーは語る主体ではなく、語られる対象に過ぎないのだ。このような設定の下ではオリヴァーが消極的人物となるのは、ある程度避けられなかったと考えられる。

この小説の中でオリヴァー自身が自らについて語ることは稀である。さらに、オリヴァーは語る意志すら持っていない。それを端的に表わしている場面がある。書齋に並ぶたくさんの本を見せられ、大人になったら本を書きたいかとブラウンローに尋ねられたオリヴァーは「それよりも本を読みたいと思います」 ‘*I would rather read them, sir*’ (OT94)と答える。これに対してブラウンローは「君を著者にはしないよ」 ‘*We won’t make an author of you*’ (OT95)と応じる。書くよりも読みたいというオリヴァーの受身の姿勢が如実に表われている台詞だが、この会話が示唆しているのはそれだけではない。オリヴァーは ‘*Oliver’s history*’ を直接自分で語る機会、つまり自分の物語の ‘*author*’ になる機会を放棄しているとともに、ブラウンローによってその機会を奪われてもいる。前述したように、オリヴァーの物語の ‘*author*’ になるのはブラウンローであるからだ。さらにオリヴァーが ‘*author*’ にならないということは、‘*author*’ が持ちうる自分が語る内容の ‘*authority*’ をオリヴァーは持ち合わせていないということも含意している。この ‘*authority*’ の欠如ゆえに、自ら語る数少ない機会はあるとしても、そこではオリヴァーが語る

内容は信憑性がないものとして扱われることになる。その例をいくつか挙げて見よう。

オリヴァーを保護したブラウンローが「身の上話を聞かせてくれないか」 ‘Let me hear your story’(OT96) とオリヴァーに彼の経歴を尋ねる場面があるが、ここでのオリヴァーの語る行為は次のように述べられている。

Oliver’s sobs checked his utterance for some minutes; when he was on the point of beginning to relate how he had been brought up at the farm, and carried to the workhouse by Mr. Bumble, a peculiarly impatient little double-knock was heard at the street-door: and the servant, running up stairs, announced Mr. Grimwig. (OT 96)

すすり泣きのためにオリヴァーは数分間言葉が出なかった。託児所でどのように育てられ、バンブル氏によってどのように救貧院に連れて行かれたのかを話し始めようとした時、玄関でとりわけせっかちに二回ノックする音が聞こえた。召使が階段を駆け上がって、グリムウィグ氏の到来を告げた。

このようにオリヴァーの語る行為とその内容が間接的に記述されているだけで、オリヴァーが自分の言葉でどのようにブラウンローに語りかけたのかは読者に明らかにされない。無論、読者はここでオリヴァーが述べようとした彼の経歴については既に知っているわけだが、それを語ったのはオリヴァーではなく、この小説の語り手である。つまり、オリヴァーは語り手としての力を持っていないことを意味する。さらに、救貧院でどのように育てられたのかという自分の経歴にとって一番大事な点を述べようとした時にグリムウィグが到着し、オリヴァーの話が遮られるという点も重要である。そしてこの場面の後、オリヴァーは使いに出され、そこでナンシーとサイクスに捕まり、フェイギンの元へ連れ戻されたことで、ブラウンローに自分の経歴を語る機会を奪われてしまう。つまり、ここでオリヴァーは ‘author’ になり損ねるのである。

もう一度、これと同じようにオリヴァーが自分の経歴を語る機会を与えられる場面がある。サイクスによるメイリー家への夜盗が失敗に終わった後、メイリー家に保護されたオリヴァーが彼らに語る場面である。

The conference was a long one; for Oliver told them all his simple history: and was often compelled to stop, by pain and want of strength. (OT211)

会談は長いものだった。と言うのも、オリヴァーは自分の簡単な経歴を彼らに全て語ったのだが、痛みと体力不足のためにしばしば話をやめなければならなかったからだ。

ここでも先の場合と同様、オリヴァーが自分の ‘history’ をどのように語ったのか具体的には述べられておらず、間接的に記述されているだけである。また怪我と病気のせいとは言え、オリヴァーが話すのに苦労していることは、オリヴァーの語り手としての弱さを暗示しているとも考えられる。さらにこの場面で重要なのが、ここでオリヴァーが語った話が信憑性のないものとして扱われることである。ロンドンから取調べに来た警官にオリヴァーの話を正直に伝えれば、オリヴァーの無実を彼らにも信じてもらえるだろうとローズは考えるが、ロズバーンは、警察はオリヴァーの話を信用しないだろうから、彼らにそれを伝えることはできないと主張する。つまり、オリヴァーの話は ‘authority’ がないものと見なされるのである。

また、オリヴァーは自分の出生にまつわる秘密の解明にも、一切関与しない。ブラウンローやロズバーンなどが、フェイギンと共謀してオリヴァーの過去を葬り去ろうとしたモンクスからオリヴァーの秘密を聞き出し、‘Oliver’s history’ を完成させるのである。当のオリヴァーはその話を聞く側の人間に過ぎない。つまり、オリヴァーはこの小説の読者と同じ立場にいることになる。ブラウンローに言ったように、オリヴァーは書き手にはならず、自らの物語の読み手となったのである。オリヴァーの消極性とは、自ら行動をとらない受身の姿勢というだけでなく、自らの物語であったはずの『オリヴァー・トゥイスト』において、自分で語る意志も持たず、語る機会も与えられていないということにも当てはまる。「オリヴァーの真の運命は書かれた物語の題材となること、台本を書かれることであった—— 外面的にはチャールズ・ディケンズ、内面的にはフェイギン、モンクス、そしてゆくゆくはブラウンロー氏によって」 ‘Oliver’s true destiny is to be the subject of a written story, to be scripted—externally by Charles Dickens, internally by Fagin, Monks, and eventually Mr. Brownlow’ (24)というトレイシーの評言は正鵠を得ていると言えよう。

V

以上見てきたように ‘history’ の意味は物語の進行とともに変化し、語り手もそれとともに変容を遂げるわけだが、語り手自身、そのことを最後にはっきりと認めている。『オリヴァー・トゥイスト』の最終章は次のように始まる。

The fortunes of those who have figured in this tale, are nearly closed. The little that remains to their historian to relate, is told in few and simple words. (OT395)

この物語に現われた人々の運命はほぼ終わりに近づいた。彼らの著者が語るべき残りわずかな事柄は、ごく簡潔な言葉で語ろう。

オリヴァーの ‘biographer’ として登場したはずの語り手は、ここでは自分のことを ‘their historian’ と称しているように、この小説に登場した他の人物にまつわる物語の書き手に変貌している。そしてそれはオリヴァーの生涯を扱う物語であったはずのこの小説が、オリヴァーだけでなく他の登場人物たちの物語も扱った小説へと変容を遂げたことを表わしている。さらに結末近くでは「私が長いこと一緒に行動してきた何人かの人たちとともに残り、彼らの幸福を描こうと努めることによってその幸福を分かち合いたいものだと思う」 ‘I would fain linger yet with a few of those among whom I have so long moved, and share their happiness by endeavouring to depict it.’ (OT398) とまで述べている。これもまた語り手の関心がオリヴァーから離れ、他の登場人物に移ったことを意味している。そして注目すべきは、この最終章で他の登場人物の将来は語られるのに対し、我々読者は「オリヴァーの将来の生活について何も聞かされない」 ‘hear nothing of Oliver’s future life’ (Tracy 25) ということである。語り手がオリヴァーと徐々に距離を置き始め、‘Oliver’s history’ が、語り手が独占するものからブラウンローを始めとした他の登場人物の関心の対象となり、彼らがそれを完成させることになったことがここからも読み取れる。‘Oliver’s history’ が、オリヴァーがどのような生涯を歩むのかという彼の未来についての物語から、彼の過去を巡る物語に変わり、その物語を綴る役割が語り手から他の登場人物に移ったことを象徴する結末と言える。

このように、孤児のオリヴァーが如何なる人生を歩むかという物語に、ロンドンの窃盗団を巡る物語、オリヴァーの出生の秘密を解明する物語、ナンシーの物語など新たな物語が加わったことによるこの小説の方向転換は、‘Oliver’s history’ が未来の物語から過去の物語になるという変化を引き起こした。そしてそれは語り手がオリヴァーの ‘biographer’ からオリヴァーだけでなく他の登場人物たちの ‘historian’ へと変貌を遂げたことと同時進行である。この観点から見ると、物語の進行とともに語り手とオリヴァーの距離が大きくなるのは当然の帰結であったと言える。

*本稿は欧米言語文化学会第121回例会（2010年9月12日、於日本大学第2別館）での発表原稿に加筆修正を施したものである。

引用文献

Drew, John M. L. *Dickens the Journalist*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.

Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Ed. Steven Connor. London: Dent, 1996. (本文中の引用は OT と略記)

Dunn, Richard J. *Oliver Twist: Whole Heart and Soul*. New York: Twayne Publishers, 1993.

Miller, J. H. *Charles Dickens: The World of His Novel*. 1958. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1959.

Pykett, Lyn. *Charles Dickens*. Basingstoke: Palgrave, 2002.

Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven and London: Yale UP, 2009.

Tracy, Robert. ““The Old Story” and Inside Stories: Modish Fiction and Fictional Modes in *Oliver Twist*.” *Dickens Studies Annual* 17 (1988):1-33.

Westburg, Barry. *The Confessional Fictions of Charles Dickens*. De Kalb: North Illinois UP, 1977.

Wheeler, Burton M. “The Text and Plan of *Oliver Twist*,” *Dickens Studies Annual* 12 (1983):41-61.

Fortuna 第 22 号 (欧米言語文化学会、2011 年) pp. 21-31.